

Vol.6

## はじめに

《三好企画の web サイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることはお断りします。

これは 1931 年の日本社会、世界の航空機、航路についての貴重な記録です。論文の部分引用にあたっては、「出典」として下記をご掲載ください。》

『ジャパン・アドヴァタイザー』The Japan Advertiser 1931 年 10 月 10 日、ジャパン・アドヴァタイザー発行 日本語訳・三好企画 2025 年

アメリカで出版されたアン・モロウ・リンドバーグ著『海からの贈り物』（1955 年）の 70 年目の記念として、まずは一部を公開します。

## 凡例

[ ] 及び\*のある部分は、訳註である。  
原文は英語なので、漢字表記が不明のものはカタカナにした。  
原版はタブロイド判 32 ページ、報道内容が重なった部分があるので一部を割愛した。

## 翻訳協力 順不同、敬称略

リーブ・リンドバーグ 兼子 奈緒美 中川 経子 浅野 正弘 平野 亮

1931年9月13～16日

## リンドバーグ夫妻、大阪・京都・奈良の観光名所を訪問

ずっと心に描いていた通りの日本に京都で会えたと断言  
奈良では放し飼いの鹿、嵐山では急流を楽しむ

9月13日、リンドバーグ大佐夫妻を関西は迎え入れた。午後3時27分、赤と黒の単葉機は銀色のフロートを木津川の川面に降ろし、優雅に着水した。東京近郊、霞ヶ浦海軍飛行場から3時間5分の飛行だった。

昨日の朝9時35分、リンドバーグ大佐夫妻は霞ヶ浦の旅館〔土浦・霞月楼〕を出発し、車で海軍飛行場に向かった。自分たちの飛行機が待機している水上飛行機用格納庫に行く前に、夫妻は飛行場の反対側の端にある飛行船用格納庫に案内された。1928年8月、世界一周中のグラフ・ツェペリン号が日本に寄航した際には、ここに格納されたのだ。夫妻は格納庫内部を見学したのち、自分たちの飛行機のところに戻った。

スポーツシャツとカーキ色のパンツに白い飛行服姿のリンドバーグ夫人は、離水に備えて綿密な点検を行っている夫を手伝った。比較的少人数の群集が出発に立ち会おうとその場に居合わせ、点検の様子を興味深く見守っていた。はるばるニューヨークから飛んできた飛行機はいま、塗装しなおされてすっかりきれいになり、格納庫から引き出されて、選ばれた20名の水夫の手によって湖面の定位置に据えられた。

そしてリンドバーグ大佐夫妻は、通信省航空局長・戸川政治氏、松永海軍中佐、笹部土浦町長、阿見村長のナガノ〔？ 野口・朝日新聞〕氏らに別れを告げ、夫妻は飛行機に搭乗した。リンドバーグ夫人はエンジンが轟音をたてる少し前、手を振って「サヨナラ」と叫んだ。同機は水面を300メートルほど滑走し、優雅に機体を浮かせて離水した。陸上機が2機すでに飛び立ち、付き添って飛ぼうと空中で待機していた。だが、リンドバーグ大佐は進行方向に水平飛行せず、湖の上を低空飛行で旋回し、5分後にもとの水面に着水した。時刻は11時23分だった。

かの大佐は、エンジン音が異常だったので降りたのだと説明した。「ゆるんだ点火プラグのせいかもしれない」と彼は推測を述べたが、「関西の目的地に向けて出発する前に本当の原因を突き止めたい」と言った。綿密な点検をするのに、エンジンが十分冷えるまでだいぶ時間がかかったが、エンジンの異常音は排気収集リングのスリーブがゆるんでいたためであることが判明した。5分もかからずに修理を終え、ふたたび飛行機は穏やかな水面を滑走し、

離水した。陸上飛行機も、再度空中で待機したが、こんどは着陸せずにすんだ。リンドバーグ大佐は十分に高度を上げると機首を南西方向に向け、ものの数分で機影は見えなくなった。

大阪での着水の模様は、いかにもリンドバーグ大佐らしいものだった。木津川飛行場上空に到着すると、大佐はおよそ 500 メートルの高度で、その上を三度旋回した。彼がのちに語ったところによると、着水の前に流木やブイなどの障害物があるかを調べるためとのことである。大佐は上陸地まで水上飛行機を滑走させ、3時27分に到着した。だが、飛行機がそこに到着する前に、リンドバーグ大佐はコックピットから上半身を乗り出し、機が上陸用の浮き棧橋に激しくぶつかって傷ついたりすることのないよう、作業員たちに大声で指示していた。

水上飛行機は、いささか画期的な方法で直ちに格納庫に運ばれた。機体の周囲に吊り索を掛けて飛行機ごとクレーンで持ち上げたのだ。リンドバーグ大佐はこの作業を非常に興味深く見守った。のちに、この作業は手際よく行われたと語っている。また、このような方法で飛行機が取り扱われたことはこれまでになかったとも言っていた。岸にあがるやいなや、彼が最初に口にした言葉は、「だれか、ねじ回しを持っていませんか？」だった。これを聞いて、居合わせた外国人はたいそう面白がった。歓迎会場となっている天幕の中に入ることを承諾する前にリンドバーグ大佐は、「短時間でいいから是非とも格納庫の中に入って飛行機のプロペラを回してみたい」と言った。目星をつけたバルブが漏れを起すかどうか確かめるために、大佐はこの作業を行った。

リンドバーグ夫妻は最初に、木津川飛行場長の佐々木氏、米国領事 E・R・ディックオーバー氏、東京日米協会の高田氏より挨拶を受けた。夫妻は着水場所から公式歓迎のために建てられた天蓋に向かい、まず、大阪府知事、大阪市長、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社を代表して大阪国際貿易委員会委員の令嬢・善積よしずみゆり子嬢からリンドバーグ夫人は贈呈の花束を受け取った。

一同に軽食がふるまわれた後、牧野知事の代理を務めるサカマ副知事、そして関市長が公式の歓迎の辞を述べた。大阪市長の歓迎の辞は以下のようなものであった。

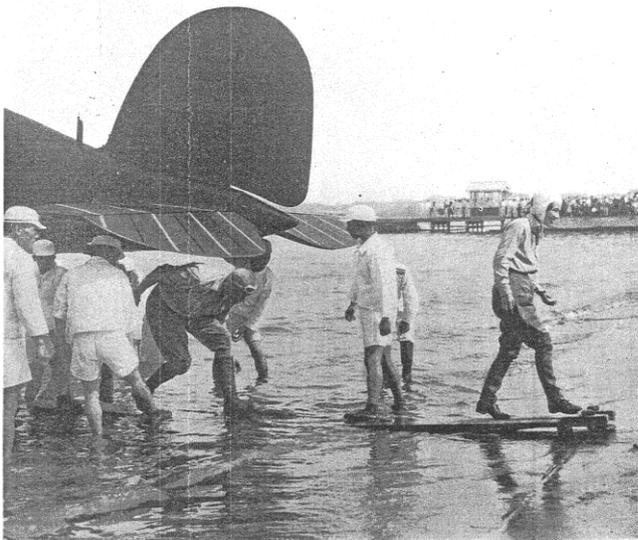
チャールズ・A・リンドバーグ大佐と夫人にご挨拶申し上げます。350 万大阪市民を代表して、リンドバーグ大佐ご夫妻を喜んで歓迎いたします。太平洋横断飛行は現代の勇氣ある飛行家たちが目標としていました。しかし、大佐のように慎重この上なく、ずば抜けた才能に恵まれた飛行家でなければ達成できない目標だったのです。

このたびの偉大な試みについて大佐が発表したという報道に初めて接して以来、大佐の成功は間違いないと確信していました。そしてそれ以来、わたしたちは大いなる関心をもって、おふたりを無事に日本の海岸にお迎えすることを待ち望んでいました。大佐の見事な偉業が航空史上に多大な貢献をしたことを、わたしたち大阪市民はすべての日本国民と共に喜ばしく思い、また近い将来、これが日米間の親善と相互通商の進展と発達につながることを信じております。

日本の商工業の中心地である大阪の私たち市民は、平和の使節であり大空の大使でもあるおふたりを賛美せずにはられません。

リンドバーグ大佐はつぎのような返礼の言葉を述べた。

わたしたちは大阪に到着次第、閣下と知事をお訪ねするつもりでした。このように長くお待たせして、まことに申し訳ありません。しかしながら、嬉しいことに皆さんのほうから出向いてくださり、感謝しています。



Going ashore at Osaka after completing the journey from Tokyo to Western Japan.

#### 【写真説明】

東京から西日本への旅を終え、岸に向かう。

#### 短い滞在を残念に思う

わたしたちがこのたびの日本到着で最も残念に思うのは、これ以上、とりわけ大阪に長く滞在することができないことです。

公式の歓迎を受けた後、リンドバーグ大佐は一般記者会見に出席することに同意し、会見は10分ほど続いた。大佐には、「ご子息はどうしているか」「日本をどう思うか」「トレ

一・ドゥニオン2号墜落のニュースを聞いたか」〔1931年9月の飛行機事故。ウラル山中で墜落し、パイロットのマルセル・ドレはパラシュートで脱出できたが、ジョセフ・ルブリと機関士のメスマンは死亡した。〕等、ありとあらゆる質問が浴びせられた。最後の質問に対して大佐は、未確認の噂は耳にしたと答えた。もしこの噂が真実ならレブリックスの死のなかで、もっとも偉大な飛行家のひとりということになる。

リンドバーグ大佐夫妻はディックオーバー氏と高田氏と共に、関西滞在中自由に使えるようにと日本ゼネラルモーター社が提供してくれたビュイック・セダンに乗って、飛行場から出発した。一行は知事公邸を手始めに数ヶ所を公式訪問し、午後5時45分、車で京都に向かった。

京都まで2時間15分かかったが、これは運転手が道を間違えて、到着が遅くなったためである。道を間違えた車は、兵士たちが大演習中の演習場の真ん中に入り込んでしまったが、なんとか兵士のひとりと呼び寄せて京都に行く道をたずねた。話している時に、彼は車にリンドバーグ大佐が乗っていることを知らされた。車内を見た兵士は驚いてしばらく立ちつき、視界の範囲内にいた手のあいている兵士を全員呼び寄せたため、予定にはなかったが、夫妻は突然、心からの歓迎を受けることになった。

一行は8時10分に京都の都ホテルに到着し、また10分ほどの記者会見を行った。その後、ホテルの部屋に引き下がり、夕食のために着替えた。

9月14日、リンドバーグ大佐夫妻は日本を代表する京都の景観地を訪れ、ふたりは明らかに感銘を受けていた。観光に出かけた日にリンドバーグ夫人は、「京都の中にいつも想像していたとおりの日本を見た」と語っている。言葉にこそ出さないが、大佐も目にしたものすべて、さらに訪れた各所で受けた説明にも興味深げな様子だった。

ホテルの自室で朝食をとったあと、その日の午前9時45分から一日の予定が始まった。夫妻は、米国領事E・R・ディックオーバー氏、東京日米協会の高田氏、京都日米協会の小川氏と共に京都府庁の佐上信一府知事へと、10時に到着した。一行は知事自らの出迎えを受けた。流暢な英語を話す府知事は、現在定まっている予定を変更して、関西滞在を延長できないものだろうか希望を述べた。それに答えてリンドバーグ夫人は、「もう2ヶ月間祖国を離れているので、これ以上滞在を伸ばすことはできないのです」と言った。佐上知事に渡米経験があることをきいたリンドバーグ大佐は、どこの都市を訪れたのかと尋ね、二人の会話がはずんだ。

【写真説明】

左上 長岡外史中将の歓待を受ける。アメリカ大使と夫人の間に座っている中将は弧を描く立派な髭で有名。

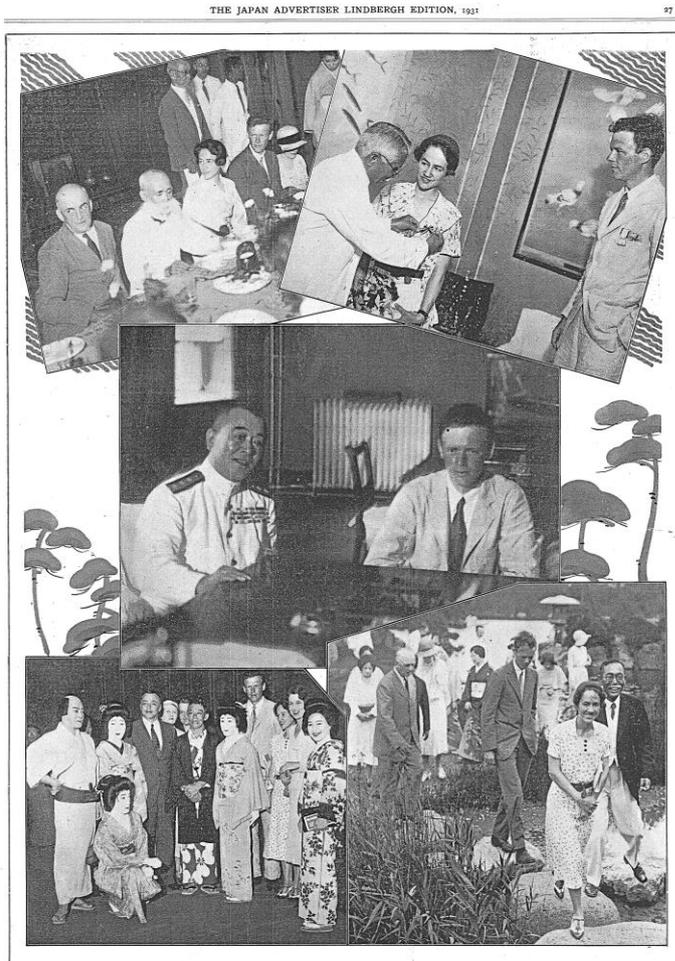
右上 帝国飛行協会より勲章を授かる。

中央 陸軍大臣安保清種大将と。

左下 松竹の招待で歌舞伎座を訪れた。この中で、日本人女性はただひとり、右端の人物である。

ほかはすべて女形の男優。〔中央は初代中村吉右衛門〕

右下 清澄庭園で永田東京市長と。



日本百貨店協会の広告

**GREETINGS TO**  
Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh

The Japan Department Store Association takes pleasure in congratulating Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh on their epoch-making trans-Pacific flight from America to Japan.  
This Association fully appreciates the spirit of goodwill fostered by this flight between America and Japan, and wishes for these two young fliers continued success and eventful journeys wherever they may go.

**THE JAPAN DEPARTMENT STORES ASSOCIATION**

|                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                       |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <b>HOTEIYA</b><br><small>Tokyo</small>                    |  <b>MITSUKOSHI</b><br><small>Tokyo, Osaka, Kyoto, Niigata, Takamatsu, Kyoto, Shimonoseki</small> |
|  <b>MATSUYA</b><br><small>Tokyo, Osaka, Yokohama</small>   |  <b>NOZAWAYA</b><br><small>Yokohama</small>                                                      |
|  <b>MATSUZAKAYA</b><br><small>Tokyo, Nagoya, Osaka</small> |  <b>SHIROKIYA</b><br><small>Tokyo, Osaka, Kyoto, Osaka</small>                                   |
|  <b>TAKASHIMAYA</b><br><small>Tokyo, Kyoto, Osaka</small> |                                                                                                                                                                                       |

## 市庁舎を訪問

10時25分、一行は市庁舎に到着した。リンドバーグ大佐は土岐市長に通訳をとおして、京都の町で目にとまった素晴らしい街路に対する満足の意を伝えた。助役の安川和三郎氏と村田武氏らが飛行家夫妻に紹介された。一行は部屋から街の様子をしばし眺めてから市庁舎をあとにした。県庁でも市庁でも、リンドバーグ夫妻はあちらこちらから注目を集めた。堂々とした厳めしいお役人でさえも夫妻の姿を見て挨拶をするために、雑用係りの少年と一緒にになってそれぞれの執務室を飛び出した。

その日の観光は京都御所から始まった。9月14日は吉住神社で祭礼が行われているために一般の観光客は中に入ることができなかったが、特別な手配がされて門が開き、リンドバーグ夫妻は内部を見ることができた。リンドバーグ夫人は特に内部装飾に興味を抱き、闘犬の絵や様々な御所の部屋に格別の興味を示した。また夫人は、踏むと鳴る床〔鶯張り〕の音を面白がっていた。即位の間では、自分が授与された勲章には即位の儀に参列する資格があることを聞かされ、リンドバーグ大佐は興味深げだった。11時に一行は御所をあとにした。

次に訪れたのは二条城で、夫妻は、造りが御所とはまったく対照的であることに言及している。京都御所は簡素で飾り気のない様子だったが、二条城は華麗で、漆塗りや色彩豊かな装飾を用いた、非常に趣向の凝らされた造りだった。リンドバーグ夫妻は昼食をとるために都ホテルに戻り、個室のダイニング・ルームで食事をした。

## 離宮を訪れる

夫妻は午後2時少し過ぎに再び観光を続け、京都市内から8キロほどの距離にある修学院離宮を訪れた。石灯籠や趣のある橋、流れる小川、仮設の夏の茶室、庭のあちこちに点在する湖を模した池などが、色彩豊かな背景の中で美しく輝いている様子を夫妻は楽しんだ。リンドバーグ夫人は次のように語っている。「わたしは日本がどんなに素晴らしいか、分かっています。」「日本の画家たちがあのような作品を創り上げることができた理由をやっと理解できました。あれは誇張でもなんでもなかったのですね。」夫人は美術的な見地から、特に松の木が魅力的だと感じ、離宮の小高い丘の上から眺めた周囲の山々と京都の町の風景に、夫妻はふたりとも感銘を受けた。

大佐と夫人は次に、途中、古い茶器を売る店が立ち並ぶ通りを抜けて清水寺に向かった。夫妻はまた、参拝客が足を止めて祈りを捧げている滝も見た。

浅瀬に停泊させた飛行機に行くときに使うために、長いブーツを買いだめとリンドバーグ大佐が言ったので、一行は大丸百貨店に立ち寄った。一行が店に入って5分もしないうちに「リンドバーグ大佐だ」と叫ぶ者がおり、あっという間に店内にいた大勢の買い物客が有名である夫妻を間近で見ようと群れをなして押し寄せてきた。このため、夫妻は大急ぎで店

を出なくてはならなかった。ちなみに、大佐の足にあうだけの大きさのサイズが在庫にないことが確かめられたので、ブーツは買わなかった。

### 古美術店を訪れる

午後、夫妻の次の立ち寄り先は山中商会だった。リンドバーグ夫人は日本と中国の美術品を多数興味深く、じっくりと見てまわった。もっとも、飛行機で荷物を運ぶことは不可能なので、夫妻は何も買うことができなかった。古美術店からホテルにもどった夫妻は、一日楽しく観光したと感想を述べている。

その晩 7 時 30 分、リンドバーグ夫妻は料亭中村屋に向かった。京都商工会議所会頭の小沢氏が、芸者〔舞妓?〕が接待する日本食の晩餐会に夫妻を招待したのである。招待客の人数はわずか 12 名で、極めてくだけた雰囲気の内輪の宴会だった。出席者は、佐上知事、土岐市長、ディックオーバー氏、高田氏、小川夫妻、小沢夫妻らだった。

9 月 15 日、大佐と夫人は都ホテルで朝食をとり、午前 10 時にホテルを出て、同志社大学に向かった。夫妻は大学でフローレンス・デトン女史と 30 分ほど面談した。女史は女子部を担当しており、大学に 40 年間勤務している。リンドバーグ夫妻が到着した時、たまたま休憩時間だったため、校庭に出ていた数百名の女子学生は、たちまち夫妻めがけて押し寄せて歓迎の出迎えをした。

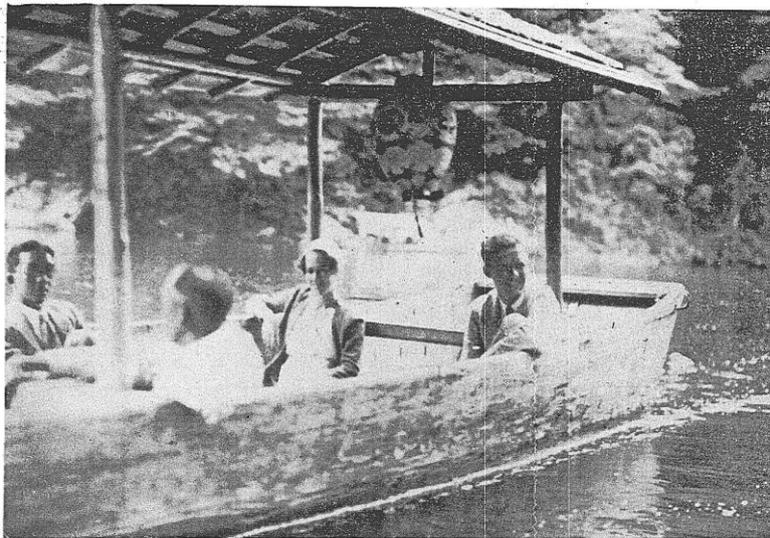
次に夫妻は金閣寺と庭園を訪れた。池に架った橋や石灯籠、樹々を鑑賞しながら、庭園を 30 分ほど散策した。このあと、郊外に 10 キロほど離れた嵐山に車で向かった。嵐山ではまず竹林を抜け、そして船で川をさかのぼり、有名な急流を下った〔保津川下り〕。リンドバーグ夫妻は、船に乗り込んで川をさかのぼる時、新聞社や映画会社のカメラマンの一団に写真撮影を許可した。夫妻は船上から眺めながら、この流れで有名な樹々の美しい葉や澄んで清らかな水に心を打たれた。

12 時 30 分、リンドバーグ大佐夫妻はホテルに戻り、主食堂で昼食をとった。2 時 30 分、夫妻は再び外出して、西村漆工房を訪れ、いくつか工房の有名な作品の製作過程を見学した。ほかにも夫妻は三井男爵の注文で製作中の見事な屏風一双を見せてもらった。夫妻は漆工房から、こんどは川島織物に案内された。この工房は数多くの製品を皇室に納めている。ふたりは、錦織の帯地やつづれ織など、高価な絹地が織り上げられている様子を見て、特に東京の新しい国会議事堂の内装に使われることになっている、壮麗なつづれ織の布地に注目した。高価な刺繍生地やつづれ織が手動の織り機で織られているのを見て、リンドバーグ大佐も夫人も驚きの言葉を口にした。このような織物の作業は完璧でなくてはならな

いので、人の手に頼るしかないのだと夫妻は説明を受けた。この工房では2時間ほど過ごした。

おふたりはホテルに戻る前に、和洋折衷様式の庭園で有名な小沢夫妻の自宅を訪れ、1時間ほどを、そこで過ごした。

その晩、リンドバーグ大佐夫妻は土岐市長に招かれて、ダイイチカ〔一力茶屋のことか?〕ですき焼きの夕食の接待を受けた。そのあと南座に行き、有名な歌舞伎俳優尾上が出演している短い歌舞伎作品を鑑賞した。



Sailing down the Arashiyama River near Kyoto with Mr. E. R. Dickover, American Consul at Kobe. The Japanese in the picture is Mr. Osawa.

【写真説明】

京都近郊の嵐山で川下り。神戸米国領事のF・R・ディックオーバー氏と。

日本人は小沢氏。〔京都商工会議所会頭〕

左 大林組の広告

右 服部時計店の広告



AS the engineers building the new American Embassy in Tokyo, our association with the American People makes us particularly anxious at this time to extend our sincere congratulations on the success of the Goodwill Flight across the Pacific by Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh.

**Ohbayashi Gumi, Ltd.**  
GENERAL ENGINEERS AND BUILDING CONTRACTORS  
 TOKYO OSAKA NAGOYA  
 YOKOHAMA FUKUOKA  
 KYOTO KOBE KANAZAWA SHIZUOKA  
 HIROSHIMA  
 DAIREN TAHOKU KRIJO

We extend to Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh our most respectful felicitations and heartiest congratulations upon their completion of the first flight across the Pacific from Washington to Tokyo. It is our sincerest hope that the two famous fliers will stay in Japan a long time and while here will find the Land of the Rising Sun the most pleasant place they have visited thus far. Upon their resuming the flight to China and other countries we wish to express our best wishes to them for a most successful enjoyable journey.

**K. Hattori & Co., Ltd.**  
Proprietors of  
 Seikosha Watch and Clock Works  
 TOKYO, JAPAN

9月16日、リンドバーグ夫妻は奈良の名所を観光し、奈良が日本の政治の中心だった、記録もおぼろな太古の時代から残っている美術品や遺跡を見学した。しかし、ふたりが目にしたどんなものより、リンドバーグ大佐は奈良名物の放し飼いの鹿がもっとも印象深かったようで、何度となく鹿について言及している。夫妻の多忙な一日は桃山にある明治天皇陵参拝に始まり、奈良の晩餐会で幕を閉じた。

リンドバーグ夫妻は京都で土岐市長秘書を務めるK・アマヤ〔天谷?〕氏より別れの挨拶を受けた。夫妻は京都での滞在先、都ホテルを午前10時15分に出発して直接桃山に向かい、そこで宮内省の役人と落ち合った。役人に案内されて、東京日米協会の高田氏、米国領事E・R・ディックオーバー氏、都ホテル支配人タキモ氏とともに、夫妻は墓所に向かってゆっくりと階段を上り、陵の正面に供えられた黄色と白の菊で作られた花輪の前で頭を下げた。そのあと一行は敷地内を歩いて移動して、先の皇太后の墓所でも同様の拝礼を行った。

### 車で奈良に向かう

夫妻は車で2時間かけて移動し、12時45分に奈良に到着し、まず県庁に石黒英彦知事を訪ねた。知事は歓迎の挨拶のあと、奈良は京都より古い都であると念を押し、「数多くの美術遺産があるので、ぜひ訪ねてください」と述べた。リンドバーグ大佐は知事に感謝の言葉を述べ、さらに「街の通りに鹿が放し飼いになっているのを見るのは、本当にこれが初めてです」と言った。

次にリンドバーグ夫妻は市庁舎を訪れ、森田市長が不在のため、市議会議員の松本氏の出迎えを受けた。松本氏は、市長が午後に鹿を集める手配をしてあることを伝え、それに答えて大佐は、その様子はおそらく、日本で見るとのなかで、もっとも興味深いもののひとつになるだろうと語った。

奈良ホテルにもどったリンドバーグ夫妻は最古参の在日外国人と会い、しばし会談した。会談相手はフランス人で、ミッションスクール担当のカトリック教会神父・ビリオン師である。ビリオン神父の年齢は93歳で、そのうちの57年間をこの国で暮らしている。老神父はたどたどしいながらも英語で「お目にかかれてとても光栄です」と夫妻に挨拶した。そのあと神父は、若い頃の面白い出来事を物語った。

「実際に人間が飛んでいるのをわたしが見たのは、82年前の1854年のことです。あれはリヨンでした。ひとりの気球操縦士が気球で空に昇り、パラシュートで降りる代わりに一對の羽のような装具を使って下降したのです。男は1時間以上もその道具で空を滑走し、ふたたび地面に着陸しました。」

リンドバーグ夫人とビリオン神父は時おりフランス語でも会話した。夫妻が会談の場を去ったとき、神父は「なんとまあ、大きな男だねえ、まったく」と感想をもらしている。

### 協会より記念品贈呈

昼ごろ、大阪から関西日米協会会長の稲村氏が到着し、協会を代表して夫妻に記念品を贈呈した。それは銀の象嵌が施された漆塗りの箱で、またリンドバーグ夫人に黄と紫の蘭の花が贈られた。

奈良ホテルのメインダイニングルームで昼食をとった後、一行は伊勢神宮、出雲大社に次いで8世紀初頭に建立された春日大社に向かった。この神社は日本でもっとも歴史があり、人々の信仰を集めている聖地のひとつである。神社の案内係に伴われて夫妻は同神社を見学し、敷地内にある600年以上前に作られた木製の傾いた階段と、同じ根から生えている7本の木に、特に興味をもった。

次に夫妻は二月堂を訪れ、そこで見かけた老女が建物の周囲を100回ぐるぐるとまわっている様子を面白がっていた。100回まわると健康になれるという古い信仰があるのだと、夫妻は説明を受けた。また、寺の巨大な鐘を見学した。これは重さ48トンの日本最大の鐘で、西暦732年に鑄造されたものである。

この東大寺では大仏にも大きな感銘を受けた。これも日本最大の仏陀の像である。大仏を遠くから見ると、光背のせいか、実際の大きさと違って見える点について夫妻は言及した。そして間近で見たあと、普通の人間が大仏の鼻孔に入ることができるかどうかと想像していた。

その後、夫妻はコクダンに行き、知事と市長からお茶のもてなしを受けた。鹿を集める手配はすんでいた。世話人のラッパのひと吹きで優雅な姿の鹿が400頭ほど、じゃがいもや固形飼料の餌にありつこうと四方八方から飛び跳ねながら集まってきた。その様子を、居合わせたパラマウント社のカメラマンが詳細にわたりフィルムに収めた。それから間もなく、リンドバーグ夫妻はオープンカーに乗り、春日山周辺をまわって標高457メートルの頂上〔若草山か?〕にたどり着いた。そこからの眺望は素晴らしく、東京からたどって来た飛行ルートをリンドバーグ大佐は覚えていて、木津川の特に広い流れをもとにルートを確認した。

いったんホテルにもどったあと、夫妻は買い物のために外出した。荷物を軽くするために、持参してきた重い毛布をもっと軽いものにしたいと思っていたのだ。

その晩7時30分、ディックオーバー氏は夫妻に敬意を表して月日亭で送別の夕食会を開いた。料理は和食だった。出席者はリンドバーグ夫妻、ディックオーバー氏、高田氏、奈良ホテル支配人メンモツ氏〔けんもつ?〕だった。

## リンドバーグは憶えていた

些細な事柄が偉人の記憶から抜け落ちてしまうのは、良くあることだ。有名人ともなると考えることが他にたくさんあり、色々なことに時間をとられてしまうのだから。そこで、もし著名な人物が人生のよりささやかな事柄に対して実際に注意を払うと、たちまち偉大な人物としてだけではなく、つまるところ、真に人間らしい人間として認められるのだ。

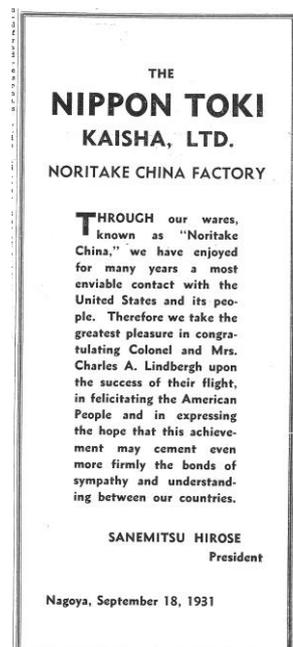
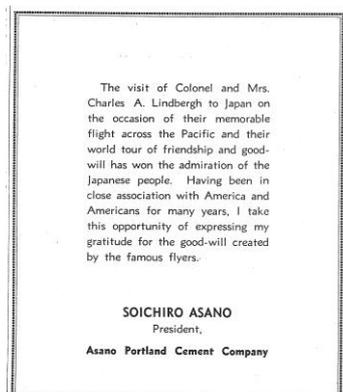
大阪で赤と黒のリンドバーグ夫妻の単葉機が船架に繋がれているとき、ジャパン・アドバタイザー記者の特派員の横にアメリカの英雄の幼い崇拜者がおり、ロッキード社製シリウス号の構造について、あらゆる種類の単純な技術的なことについて、次から次へと質問を繰り返していた。著名な飛行家夫妻の一举一動を目で追っているとき、少年は隣にいる特派員がこれから夫妻に会うらしいことを知った。彼は白紙のカードを3枚、記者の手のひらに置いて言った。「ねえ、もしおじさんがこれからまたリンドバーグ大佐に会うことがあったら、お願いだから、このカードにサインをもらってくれませんか?」記者はカードを受け取り、できるだけことはしてみようと約束した。

飛行機から渡し場に移動しているとき、リンドバーグ大佐が乗っている車の踏み台の上に記者が立っていると、白紙のカードを持っていないかと大佐が尋ねてきた。記者はカードの出所と経緯を説明し、後ほど代わりに大佐の名刺にサインをしてもらう約束をとりつけてから、少年からあずかったカードを大佐に譲った。

京都に到着したときには、記者はすっかりその出来事を忘れていた。4日後、奈良ホテルのダイニングルームにいるとき、リンドバーグ大佐がやってきて、サインを入れた自分の名刺を3枚手渡してこう言った。「君の小さな友人のためにサインすると約束した名刺です。もっと早く渡せなくてすまないと思っているが、ご存知のように、わたしたちは忙しかったものだから」。ちなみに、リンドバーグ大佐がパリからアメリカに戻ったとき、大佐が頼まれたサインの量を集計してみると、1日に14時間、1分間に20枚の割合で書いても、8年間もかかるほどだった。

左 浅野セメントの広告

右 日本陶器の広告



THE significance of the trans-Pacific flight of Colonel and Mrs. Charles Augustus Lindbergh from America to Japan makes it a fitting occasion for paying respect to the American people.

The Prefecture of Kanagawa, the City of Yokohama and the Chamber of Commerce and Industry respectfully tender their felicitations to Colonel and Mrs. Lindbergh and to the American people, and also take this opportunity of expressing abiding respect and admiration for the enduring national virtues and ideals now exemplified in this historic and glorious event.

Mr. J. YAMAGATA  
Governor of Kanagawa  
Prefecture

Mr. I. ONISHI  
Mayor of Yokohama City

Mr. T. ISAKA  
President, Yokohama  
Chamber of Commerce  
& Industry

Mayor H. Seki of Osaka  
Extends the Greetings of the Greatest Industrial  
City of Japan to  
Colonel and Mrs. Lindbergh  
on Behalf of  
Its Four and a Half Million Citizens

- 上 神奈川県知事 横浜市長 横浜商工会議所会頭による祝辞広告  
下 大阪府知事による祝辞広告

1931年9月17日

リンドバーグ夫妻 福岡に飛んだのち中国に向かう

荒天をつき、大阪から九州へー劇的な光景を残し日本を去る

9月17日の午後、リンドバーグ大佐夫妻は、飛行にはまったく適さない悪天候の中、3時間あまりをかけて大阪から九州に到着した。航程のほとんどで時折のわか雨と雲と視界不良に悩まされた。ジャパン・アドヴァタイザー記者は、リンドバーグ大佐を先導する日本空輸会社の飛行機にパイロットと同乗していた。その間、少なくとも3回、引き返すかあるいはもっとも近い飛行場に着陸すべきかどうか選択を迫られる状況を経験し、一度など、天候のために航路を変更せざるをえず、内陸を直接つつきらずに海岸沿いを飛んだ。

リンドバーグ夫妻は午前8時15分に奈良ホテルを出発し、9時50分に大阪に到着した。夫妻はまず大阪の聖バルナバ病院を訪れ、3回目の腸チフス予防注射を受け、次に日本ジェネラルモーター社を訪れて、社長のR・A・メイ氏に関西滞在中ビュイックを使わせてもらった礼を言った。リンドバーグ氏は、そこで社長補佐のキンケイド氏と再会した。キンケイド氏がフェアチャイルド航空機会社の製造部長だったとき、ふたりはアメリカで知り合った。

11時30分、リンドバーグ夫妻は飛行場に到着した。飛行機の様子を調べているとき、大佐は突然きびすを返し、その場にいた東京日米協会のタカタ氏に何か言った。そのあと見物人たちが目にしたのは、2名の警察官がひとりの若い密航者を引きずり出す光景だった。若者は清水マツジ〔日本の新聞報道では仮名・清水梅三となっている〕、17歳だと判明した。清水は飛行機がアメリカに行くものと思い、太平洋無賃渡航を試みたのだ。飛行場長の佐々木氏は、少年は夜間、飛行機に忍び込んだに違いないと語った。飛行場に届いた気象情報は、ルート上ところどころ曇って雨が降っているが飛行にはまったく差し支えない、という内容だった。リンドバーグ大佐は情報を検討し、結局、出発することに決めてエンジンを始動させた。

その間に先導機は飛び立ち、リンドバーグ大佐が離陸するのを待ちながら飛行場の上空を旋回していた。ところが大佐はいつもの注意深さを発揮し、まず水面を慎重に移動しながら、これから滑走するコースに流木などの障害物が浮かんでいないか確認していた。この作業にはかなりの時間がかかったので、付添い機のパイロットは何か不都合なことでも起こったのではないかと考え、まさに降下しようとしたその瞬間、リンドバーグ機は一気にスピードをあげて水面を突進し、離水した。

## 出発時は好天

高度 500 メートルまで上昇すると、リンドバーグ大佐は先導する日本空輸会社機のを追った。1 時間 10 分あまり好天が続き、両機は 1 時 10 分に神戸上空を通過した。だが、四国の今治にさしかかると、高度約 425 メートルで両機は濃い雲の中にはいった。

その後の 15 分間、視界は極度に不良だった。先導機のパイロットはもう少しであきらめて引き返し、松山に着陸しようとしたところだった。だが、結局、妥協してコースを変更し、内陸をまっすぐに突っ切って福岡を目指すかわりに、海岸線をまわって行くことにした。とは言え、状況は完璧にはほど遠く、およそ高度 475 メートルを飛んでいた飛行機は大方濃い雲と強風の猛威に直接さらされ続けていた。しかし、このような状況であったにもかかわらず、両機は低い山並みを越え、午後 4 時頃、福岡に無事到着した。またもやリンドバーグ大佐は障害物がないことを確認するために水の上で 2 回旋回して、4 時 1 分に着水した。

リンドバーグ大佐夫妻が岸に上がると、100 名ほどの女子学生の一団が歓声をあげて旗を振った。そのほかにも、1000 名ほどの見物人が詰めかけていた。リンドバーグ夫妻が格納庫の中に入ったあと、飛行場長の高石氏と福岡市助役の福井氏が公式に出迎いの挨拶をし、助役は歓迎の辞を述べた。助役令嬢はリンドバーグ夫人に花束を贈呈した。歓迎会出席者の中には、リンドバーグ夫妻が軽井沢滞在中に知り合いになった、西南学院長のジョージ・W・ボールディン氏がいた。いつものような式次第が終わると夫妻は飛行場をあとにして、6 時 15 分に共進亭ホテル〔博多・呉服町にあった〕に到着した。

## 付添い機のパイロットを賞賛

ホテルに着いたリンドバーグ大佐は、道中、付添い機のパイロットの先導が貴重なものだったと賞賛の言葉を述べた。また大佐は空から見た瀬戸内海の美しさに心を打たれ、「最高に美しい眺めだった」と感想を述べている。

ジャパン・アドヴァタイザー記者は、大佐の飛行機で起きた密航未遂事件についてコメントを求めた。「件の若者が拘置されることは望まないが、今後このような企てを思いとどまらせるために何らかの処置をとる必要があると思っている」と大佐は答えた。一時期アメリカで飛行機の密航が流行ったことを大佐は思い起こした。今日の飛行では、密航者を発見しそこなうと、その分増えた重量により非常に危険であると大佐は言った。また、自分の許可なしに誰かが飛行機に乗ったのはこれが初めてのことだと付け加えた。

到着の翌日、リンドバーグ大佐の一日は挨拶に訪れた市役所の役人をホテルで迎えることから始まった。午後には公式行事が行われる予定だったが、午前中、大佐は飛行場で翌日の

フライトに備えて飛行機を入念に点検し、燃料とオイルを補給した。それから、12時30分にホテルに戻り、夫人と共にホテルで昼食をとった。そのとき、西南学院長ジョージ・W・ボールディン氏とジャパン・アドヴァタイザー記者が同席した。

その日の午後、リンドバーグ夫妻は西南学院の学生部長佐々木氏に伴われ、2時30分に県庁舎を訪れた。知事が不在のため、教育長の猪俣氏が代わりに出迎えた。そのあと夫妻は西南学院を訪れ、講堂に集まっていた500名ほどの学生の歓呼で迎えられた。また、外国人教職員とも面会した。

次にリンドバーグ夫妻は、ジギスカンの壁〔元寇防塁〕として知られている日本の遠い過去の遺跡を見学した。600年前、モンゴル帝国の支配者が日本侵略のために派遣した軍隊を追い払うために建設されたものである。夫妻はまた、市内の東と西の公園を訪れた。特に西の公園からは港が良く見えた。

それから夫妻は九州帝国大学を訪問し、工学部長の荒川〔文六〕氏の歓迎を受けた。そのあと、ネクタイや着物の帯、その他の製品を製造している官営の産業実験工場を訪れ、特に、布地を織り出す手動式と機械式、両方の織り機に興味を示した。リンドバーグ夫人には帯地が、大佐にはネクタイが贈られた〔新聞報道では美しい博多人形と博多織のネクタイとなっている〕。

次にリンドバーグ夫妻は福岡女学校学長のもとを訪れた。大勢の女生徒の歓迎を受け、短時間そこで過ごしたのち、夫妻はホテルに戻った。

その晩、夕食後に開かれた一般記者会見でリンドバーグ大佐は、自分もリンドバーグ夫人も日本滞在を非常に楽しみ、また一般の人々のみならず政府関係者から受けた親切に大変感謝していると記者たちに語った。また、今回たどってきた飛行ルートによるアメリカと極東間の定期航空便の実現可能性について記者から訊ねられると、技術的観点からは確かに可能であると答えた。しかしながら大佐は、そのような運航を開始するには相当の資金の出資が必要となる点を指摘し、この先しばらくは営利目的の投機の対象としてこの運航に資金を投入しようとする会社が現れるとは思わないと述べた。

また大佐は、日本の商業航空会社を賞賛した。会社の経営はうまくいっているようであり、事業の将来は有望だと考えているという。

人々の記憶に残る訪日を終えて、チャールズ・A・リンドバーグ大佐と夫人は9月19日9時48分、九州南東部先端にある野母崎上空を越え、日本の地をあとにした。そして南京を目指して日本海上空を飛び、午後3時10分、無事に到着した。

当日朝食をとったのち、6時30分、リンドバーグ夫妻はロビーに降りて、別れを告げるためにやって来た少人数の政府関係者一同から挨拶を受けた。当地で飛行機に燃料を補給す

るときに立ち会ったスタンダードオイル社のM・W・ブラウン氏、そしてジャハン・アドヴァタイザー記者と共にリンドバーグ夫妻は名島飛行場に向かうため、7時30分にホテルを出発した。一行はホテルの外で人垣をなして集まっていた何百名もの人々の間をぬって進んだ。

### 密航者を探す

飛行場に到着すると、リンドバーグ大佐は機内に忍び込むことに成功した密航者がいないかどうか、注意深く飛行機を調べ、それから荷物を積み込んだ。また、大佐は1ヵ月は十分にもつ非常用の水40リットルほどを積み込んだ。それから最終的な気象情報を入手するために飛行場の事務所に行った。

リンドバーグ大佐は飛行機を水上に降ろすよう指示して、助役の福井氏、西南学院学生部長佐々木氏、ブラウン氏、飛行場長高石氏、アーサー・キャノン氏と握手を交わしたのち、8時21分、ふたりは機上の人となった。

数百人の群集から湧き上がる拍手の中、午前8時30分、飛行機のエンジンが始動し、リンドバーグ大佐は離水時にたどるコース上を注意深く滑走した。

10分後、単葉機は向きを変えて出発地点に戻った。だが、ふたたびコース上を、こんどはスロットルを全開にして滑走した。最後となった3回目、大佐は離水のために方向転換し、今回搭載している大量のガソリンの重量のため、1分30秒かけて離水した。8時55分、リンドバーグ大佐は離水し、飛行場上空を旋回したのち、ちょうどリンドバーグ大佐の飛行機が水上に降ろされたときに太刀洗飛行場から到着した、日本航空輸送機のとを追って南東に向かった。陸軍の飛行機も一機、飛行場上空を旋回していた。

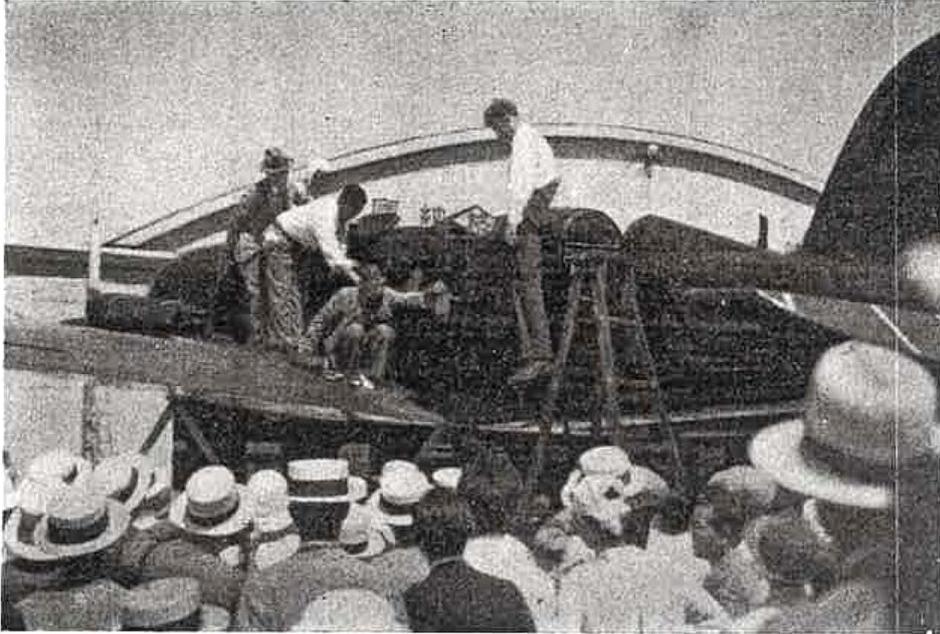
リンドバーグ大佐から日本への別れの挨拶は、野母崎から福岡までリンドバーグ夫妻に同行した日本航空輸送機に対して翼を振る形をとって行われた。その光景は、まさに壮観だった。

海岸へと導く飛行機の後方からリンドバーグ機は近づき、その飛行機を巨大なフォッカー機からわずか20メートル離れた位置に、同じ高度で横付けした。夫妻に別れを告げるためにフォッカー機に搭乗していた逡信省役人の田中氏、付添い機パイロットの国枝氏、そしてジャパン・アドヴァタイザー記者にむかってリンドバーグ大佐夫妻は手を振った。この挨拶のあと、大佐は馬力のある飛行機のスロットルを開いて先頭に出ると同時に、機体をまず右に、次に左に傾け、あたかも別れのために手を振るように翼を振ってみせたのだった。

400メートルの高度で赤と黒の単葉機は数分のうちに彼方に消え、次の目的地、南京に向かって飛ぶリンドバーグ夫妻は、もはや水平線を猛スピードで駆ける小さな点にしか見えなくなかった。

## 【写真説明】

大阪飛行場長・佐々木氏はリンドバーグ機に潜んでいた密航者を引きずり出した。  
福岡へ出発の前に。



**Manager Sasaki of the Osaka Airport forcibly removing the stowaway who was found hiding in the Lindbergh plane before the take-off for Fukuoka.**

リンドバーグは安全第一

「もし、すべてのパイロットが危険を冒さず、自分の行動が正しいと納得できるまで予防措置を実行していたら、今日、飛行機事故はもっと少なかっただろう」これは、時として見物人が不必要と思うほど離着水時にとる慎重な行動について質問を受けたときのリンドバーグ大佐の回答である。今回の歴史的な太平洋横断にあたって、孤高の鷲である大佐が準備した細心すぎるほどの注意と完璧さは、危険に満ちた北方の島々でも、また、実際に日本に到着してからも、大佐の飛行を特徴づけるものだった。

大阪に到着したとき、大佐は水面から 50 メートルの高度で川の上をさかのぼりながら飛び、飛行機を損傷させる可能性のある、マッチの軸木一本として浮かんでいないことを確認するために、一心に上から水面をのぞき込んでいた。そして、商業都市大阪から出発するときには、エンジンが十分に温まり、また、離水のために疾走する川の区域に、いささかの障害物もないことを納得するまで、ゆっくりと河口まで滑走した。

福岡到着と出発の際にも、同様の注意深さがともなった。南京まで7時間のフライトに出発するときには、離水するために滑走を始める前に、水上で3分間エンジンのスロットルを

ほぼ全開にしておいた。おそらく世界でもっとも慎重な飛行家であるリンドバーグ大佐の示す規範を、世界中の商業飛行は大いに教訓とすべきである。大阪にもパイロットが何名かいるが、温まっていないエンジンが雑音をたてているうちに離陸する者たちに対する大佐の意見を聞いたからには、今後はより安全な方法を取り入れようとするだろう。

下 国際汽船会社の広告



**KOKUSAI LINE**

In appreciation of the friendship and sympathetic understanding resulting from co-operation between America and Japan extending over many years, we gratefully express our admiration and respect for the American people, and offer our heartiest congratulations to their most beloved and noted fliers, Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh on the occasion of their memorable visit to Japan.

**Kokusai Kisen Kaisha**  
S. Kurokawa, President  
Head Office: Tokyo

## 今回の飛行記録

7月29日

ロングアイランドのノースビーチを午後1時58分に離陸（東部標準時）。3時間後、メイン州のノースヘブンに到着。

7月30日

4時33分（東部標準時）、カナダのオタワに到着。ノースヘブンから3時間23分のフライト。

8月1日

午前10時50分にオタワ発、ハドソンベイ社の交易所があるオンタリオ州ムースファクトリーに午後2時着。距離461マイル。

8月2日

ムースファクトリーを午前10時出発、751マイル離れたチャーチルまで飛行。夕方6時59分着。

8月3日

ベーカーレイクに向けて昼12時45分に出発。377マイルの飛行の後、午後5時に到着。

8月4日

逆風にもかかわらずアクラヴィックに向け、5時35分に離陸。7252マイルもの長い旅行の希望は、1115マイル先の東京である。

8月5日

アクラヴィックに早朝6時5分着。

8月7日

アクラヴィック発、夜7時30分。536マイル先のアラスカのバロウ岬に向かう。

8月8日

バロウ岬を深夜2時に出発。ここで飛距離3526マイルで、旅程のほぼ半分を完了した。

8月10日

ノームに向けて夜8時53分に出発。

8月11日

昼12時20分にノームの約100マイル北にあるグッドホープ湾に、濃霧のために強制着陸。ノームを発ってから、9時までシシュマレフに足止めされた。到着予定は10時39分だったのだが……。バロウ岬からノームまでは523マイル。

8月14日

1069 マイル離れたカムチャッカのカラジン島に向けて、午後出発。このロシア領内まで10時間49分間の旅だった。

8月16日

カラジン島からペトロパヴロフスクに4時間10分の飛行で、午後3時着（東京時間）。454 マイル。

8月19日

北海道の根室に向けて、ペトロパヴロフスクを午前9時45分に出発（東京時間）。濃霧のため4時45分、千島列島の<sup>ケトイ</sup>計吐夷島に不時着。日本領土へ初の上陸。

8月20日

<sup>ムロトン</sup>武魯頓湾への離陸を試みるが、エンジンの故障で失敗。

8月21日

シムシル丸によって<sup>ケトイ</sup>計吐夷島から<sup>ムロトン</sup>武魯頓湾まで救助される。

8月22日

エンジンの修理完了。午後2時10分、根室に向けて出発。5時5分、霧のために<sup>エトロフ</sup>択捉島紗那村の近くの沼に着水。

8月23日

午後2時25分、紗那を出発。根室に向けて飛んだが、再度の濃霧が発生。国後島の東沸から約2マイル北西にあるアンノル沼に午後5時半、不時着。

8月24日

午前7時23分、アンノル沼を発ち、根室に7時51分到着。飛行記録達成で熱烈な歓待を受けた。ペトロパヴロフスクから897マイル。

8月26日

午前8時25分、根室を出発。613マイルを飛行し、午後2時9分に到達。霞ヶ浦と東京で熱狂的に歓迎される。

9月1日

数日間の休養のために、自動車で山の避暑地・軽井沢に向かう。

9月5日

車で日光に向かう。

9月6日

車で東京へ戻る。

9月7日

横浜を公式の来賓として訪問する。

9月13日

霞ヶ浦から大阪に飛行。午後3時27分、木津川飛行場に着水。公式行事のために、車で京都へ向かう。

9月16日

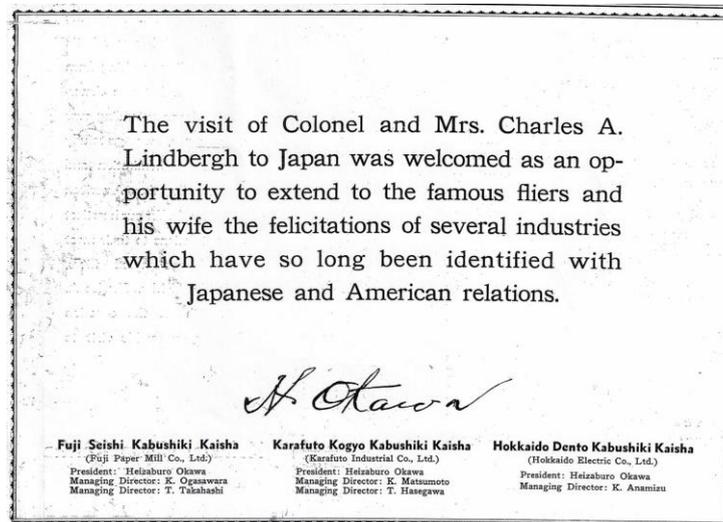
車で奈良に向かう。

9月17日

車で大阪に戻り、九州・福岡に向けて飛行。

9月19日

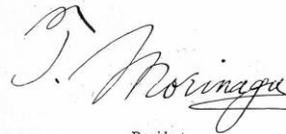
中国。南京に向けて出発。



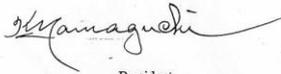
広告 上：富士製紙、樺太工業、北海道電灯  
下：森永製菓、東京電気、川崎第百銀行、東京地下鉄、日本放送協会、  
東武鉄道、南朝鮮鉄道、富国徴兵保険、日本ビール鉦泉、南開鉄道、日本航空輸送機

**P**ERPETUATING the achievements of the past, giving promise to the greatness of the future, the trans-Pacific flight of Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh from America to Japan and their vacation in the Orient is an occasion calling for the sincere felicitations of the Japanese people.

We join with all other Japanese in expressing our profound admiration for the courage, industry and noble aspirations of the American people and in hoping for the long continuation of a friendship which has endured for so many years.



President  
Morinaga Confectionery Co., Ltd.



President  
Tokyo Denki K.K.



President  
Kawasaki-One Hundredth Bank



President  
Tohoku Underground Railway Co.



Managing Director,  
Japan Broadcasting Association




President, Tohoku Tetsudo K. K.  
President, Minami Chosen Tetsudo K. K.  
President, Fukoku Chohei Insurance Co., Ltd.

President, Nippon Beer Kosen Co., Ltd.  
Director, Nankai Tetsudo K. K.  
Director, Japan Air Transport Co., Ltd.

